

三代利常の城下町・小松

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮下, 幸夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/9792

三代利常の城下町・小松

宮下幸夫（小松市立博物館）

1. はじめに

小松の城は三代前田利常が寛永十七年（1640）に隠居して入ることを契機に面目を一新し、城下も利常に従う藩士たちが移住によって城下町としての体裁が整えられるようになった。

2. 前田氏以前の小松

小松城については、利常が隠居城として寛永16（1639）年に整備するまでのことはよくわかっていない。

この頃の小松は北國街道沿いに点々と城や堡（おそらく一向一揆頃より）が築かれていて、三湖を望める台地に御幸塚城（堡）、本折城等があり、その周辺に町が形成していたものと考えられる。利常が整備するまでは、小松は九龍橋川を境に南は本折、北は小松と呼ばれていた。

藩政期の郷土史家で小松城番も勤めていた富田景周は『越登賀三州志』の中で天正4（1576）年に一向一揆の指導者の一人の若林長門が繁茂する笹藪を切り払って小松城を築いたという説を書いている。おそらくこの時は城といっても堡といったもので、砦に近いものであったろうと思われる。柴田勝家により一向一揆が鎮圧され、天正8（1580）年、織田信長は村上勝頼（義明）に能美郡6万6千石を与え小松城に置いた。



Figure 1 複製利常画像

天正11(1583)年、羽柴秀吉より丹羽長秀が越前国と加賀国の江沼・能美郡を与えられ、自身は越前北庄にいて、小松には村上義明をそのまま与力として置いた。

天正13(1585)年、秀吉は丹羽氏(長重に変わっている)を減封・配置換えし、堀秀政が小松を領有。村上義明を元のように与力として小松城に置いた。

慶長2(1597)年、秀吉により堀秀政は越後に移され、小松城の村上義明も越後本庄へ転封した。

翌慶長3(1598)年4月、丹羽長重を松任より小松城主として移した。小松8万2千石を加増し松任と合わせて12万5千石を領した。

慶長5(1600)年、天下分け目の関ヶ原の合戦の直前、東軍について金沢城の前田利長と西軍について小松城の丹羽長重との間で浅井畷の合戦がおこった。この戦い及び関ヶ原の合戦で東軍が勝利したため、丹羽長重は所領没収され、10月17日に家康より利長に与えられた。利長は小松に城代を置いた。城代が置かれた期間は、慶長5(1600)年から寛永16(1639)年の40年間で、前田長種・前田直知・前田直正・前田考貞の4人であった。

3. 利常の入城

寛永16(1639)年9月、三代藩主前田利常は幕府に願い出て家督を嫡子光高に譲り、自らは22万石を養老封として小松に隠居することにした。小松城を大拡張、大増築して隠居城とすることも許された。

利常は小松城増築の設計図を江戸にいた瀧長兵衛に持たせて小松に派遣した。原五郎左衛門・分部卜斎が協力して築城工事を始めた。丹羽氏が在城時の城を本丸とし、その東に二の丸、この南方に三の丸とした。白鳥堀を掘り、石垣を築き、城閣の造営を行ったので全く面目を一新させた。利常はこの造営途中の寛永17(1640)年6月21日に二の丸仮殿に入城した。以後、利常は小松城に十九年在城していて、万治元(1658)年10月12日に脳溢血で城内で死去。

寛永17(1640)年、小松城に入城するや、かつて白山三カ寺の一つで、一向一揆の兵火で荒廃している那谷寺をみて再興に着手した。2年後の寛永19(1642)年に復興は完了し、多くの美術工芸品を寄進している。大工は名工山上善右衛門であった。

また、前田氏は菅原氏の出自で、菅原道真の後裔であると利常は主張するようになり、城の鎮護のため鬼門の方角(北東)に小松天満宮(当時は梯天神といった)を建

立した。明暦3(1657)年であった。翌4年2月24日に遷宮式が行われた。この天満宮は京都北野天満宮の1/4の規模で、大工是那谷寺と同様の山上善右衛門であった。また、美術工芸品を初め、多くものを寄進している。北野天満宮の社僧の能順を招いて別当とした。

これら那谷寺と小松天満宮の主要な建物は国の重要文化財に指定されている。

その他、多太神社には社領と社宝を寄進。本折日吉神社には社領を寄進。菟橋神社・葭島神社へは社領寄進と社殿造営。吉竹の幡生神社の社殿造営を行っている。また、郊外等にあった本蓮寺、勸帰寺、勝光寺、称名寺、興善寺、正覚寺、上宮寺、建聖寺、法界寺、妙円寺などに土地を与え、小松に移転させている。これは、神仏に対する崇敬の念があったこと他に、火除地の機能を持たせることでもあったと考えられている。

利常は小松城の修築とともに城下町の整備も行った。先の絵図で見る限り、計画的な町割りのもと、住民の集約的な街区の形成も見られる。このことは、城や寺社の造営が相次いだため、職人などが小松に集まり、同業者を同一の町に住まわしたこと(本大工町や新鍛冶町などの町名に見られる)でもわかる。

4. 利常以後の小松城

同年12月28日、綱利(綱紀)に利常の隠居領(22万石)及び小松城の相続が許され、横山左衛門忠次が支配を命ぜられた(城代)。以後城代が置かれたが、延宝7(1679)年に城番を置くようになったため、明和8(1771)年から城代は任命されなくなった。しかし、文久3(1863)からはまた城代が置かれるようになった。城代は都合13人、城番は総計152人いた。

利常が死去した後、主に二の丸の建物を取り壊して金沢へ運んだ。明治5(1872)年、城の取り壊し、堀の埋め立てが行われた。建物は壊されたり、移築されたりし、建具などは民間に払い下げされたものもある。しかし、大部分は消滅した。

現在、本丸櫓台石垣、本丸堀石垣の一部が現地に残っている。その他、二の丸の鰻橋御門、本丸の二階御亭入口扉、中土居の兎御門扉、葭島御殿兎門扉として一部遺構が残っている。

5. 利常以後の小松城下町

多くの藩士が金沢へ移ったことは、町の規模を一気に縮

小させ、町の衰退に一旦は向かった。しかし、小松町は能美郡で最大の町であり、海運の基地である安宅町と梯川の舟運で結ばれ、また、街道の結節点であることより能美郡の物産の集散地としての役割をにない、多くの消費人口がいることより町が発展していくようになった。

特に寛永14年（1637）の絹問会所、茶問屋設置、正保4年（1647）の魚問屋設置、寛文2年（1662）の塩問屋設置などにより能美郡における流通の拠点となったことは大きい。北陸道の宿駅として旅籠が設けられ、巡見上使や武士ばかりでなく、庶民の旅に対応する施設が設けられ、保とや物資の輸送手段として、馬や人足が常備された。さらに中世以来の伝統を持つ小松絹が、利常の保護もあり生産が拡大し、地場産業として多くの生産者と流通に携わる人々を擁した。

寺社を城下に集めたため、郊外に住んでいる氏子、檀家の人たちは、お宮の祭りやお寺のおまいりには城下に来るようになりにぎわったと考えられる。

これは利常が小松に来て、計画的な町（街）作りを行い、産業及び美術工芸を育成し、文化・芸能を奨励したことにより、利常が亡くなっても町が発展していく要因になった。

6. 最近の発掘成果

平成17,18年度に（財）石川県埋蔵文化財センターにより梯川左岸に近い大川町で発掘調査を行っている（大川遺跡）。元々は泥町といわれた所で、街道に面して間口が狭い町屋や北國街道の道路敷や石垣を持った堀やそれに掛かる橋の橋脚が検出された。小松城下町の初めての発掘であり、古絵図との対比で注目されたものであった。

それより先に、平成11年度より県立小松高等学校の改築で同じく（財）石川県埋蔵文化財センターにより小松城内で発掘調査が行われている。以前の校舎で攪乱を受けていたが、本丸南東隅の石垣や二の丸の石垣、二の丸と本丸の間の堀、井戸跡などの外に、築城以前の墓地があったと想定される宝篋印塔や火葬骨などが多数出土している。

7. おわりに

利常の隠居地における整備は、大々的なもので、城下は発展し、現在の小松の産業・文化の礎として特筆されるものである。

二度の大火から見事によみがえった小松の力は、このような利常の政策にその源があるのではなからうか。



Figure 2 小松城本丸南東隅の石列



Figure 3 大川遺跡 検出された町屋



Figure 4 大川遺跡 北國街道と堀

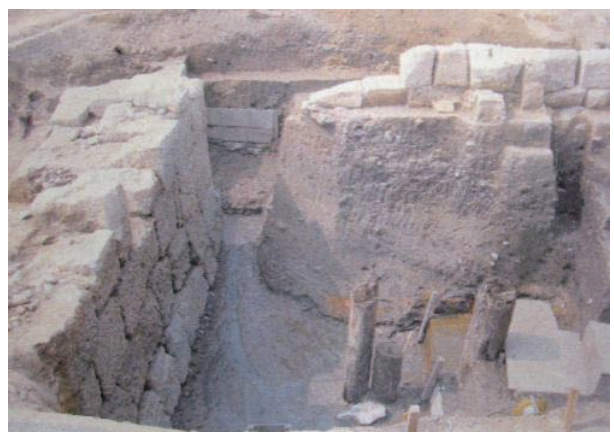


Figure 5 大川遺跡 堀の石垣と橋脚

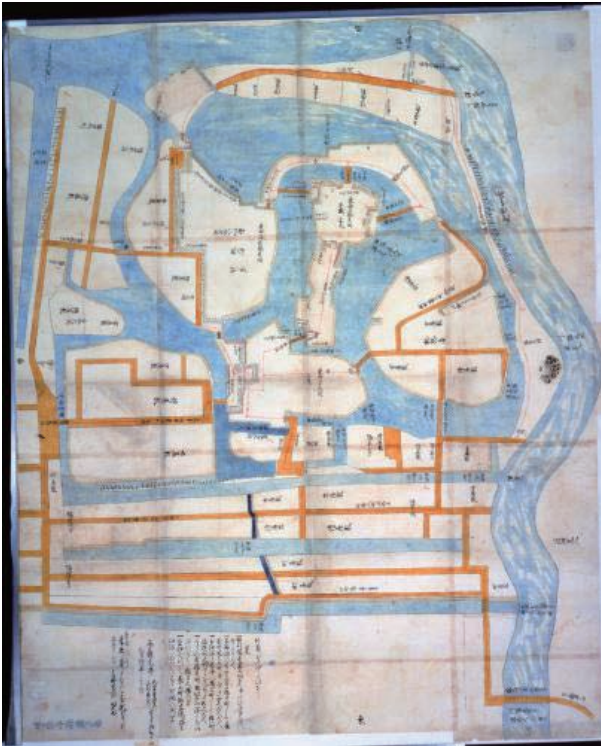


Figure 6 加州小松城之図



Figure 8 小松城及び城下之図

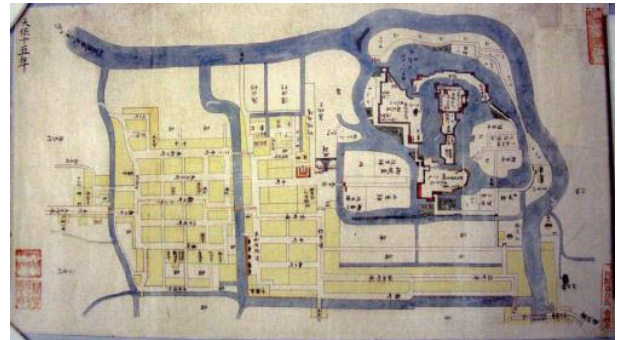


Figure 9 小松城併に城下図天保15年

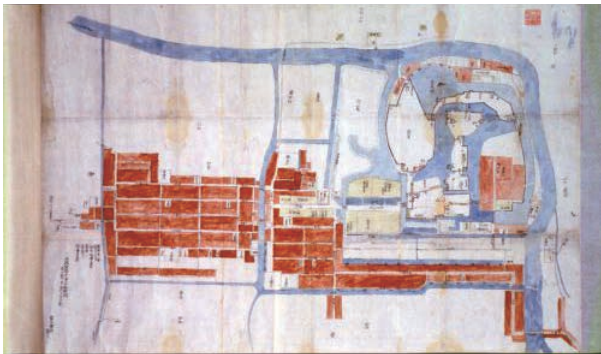


Figure 7 小松御城中併小松町図



Figure 10 昭和20年代撮影

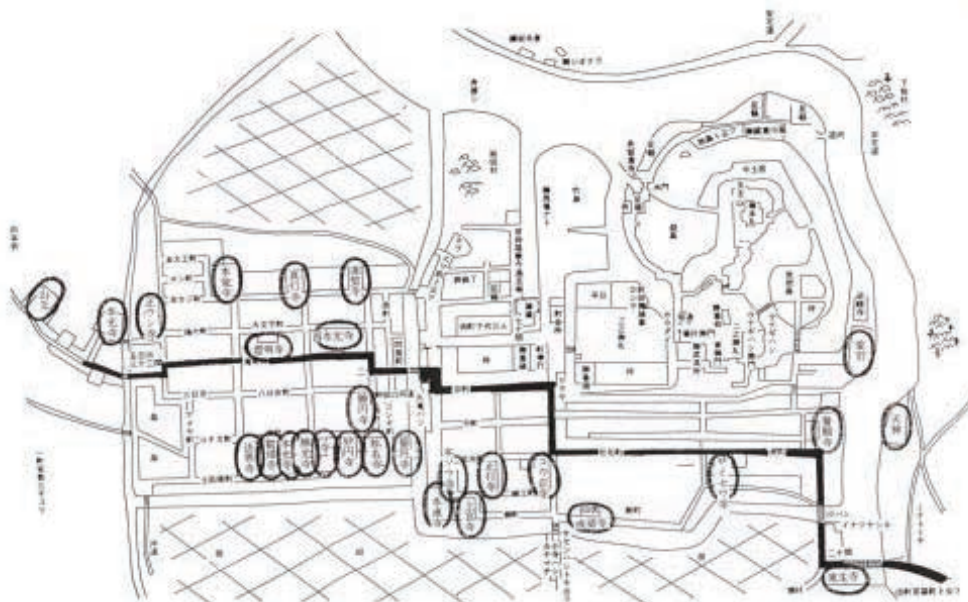


Figure 11 小松御城跡併町割



Figure 12 芦城公園入口



Figure 16 昭和15年の小松城天守台



Figure 13 三の丸入口の現状



Figure 17 現在の天守台



Figure 14 三の丸入口の現状



Figure 18 本丸・天守台



Figure 15 大正中頃の小松城天守



Figure 19 本丸西石垣

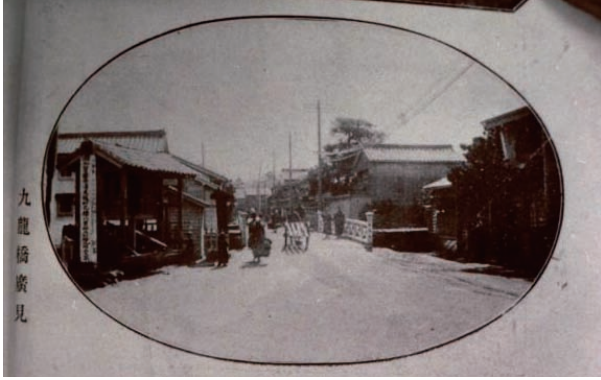


Figure 20 九龍橋界隈



Figure 21 京町交差点



Figure 22 河岸端古写真



Figure 23 現在の河岸端通